

## 二人のヘロデ

高田 友

耶穌イエズス生誕せらるるをりしも、東方の三博士、ベツレヘムの星を標しるしにして、禮拜を捧げんとて訪おもむひ來れり。ヘロデ大王、ユダヤ人の王出生せらるると聞きて、己が威の脅かされんことを恐れ、嬰兒耶穌を殺害せんと企てたりと馬太傳マタイにあり。

三十餘年の後、耶穌處刑せられんとする時、ローマ總督ピラト、耶穌をヘロデの許もとに送りて、これが裁斷に委ねんとしたるの記事は福音書洩れなく記載する所なり。

然しか則からば、耶穌の天あめが下にありし間、カナンの地は終始ヘロデ大王に統治せられたりや。

豈圖はからん、耶穌生誕の砌みぎりのヘロデと、處刑に拘はりたるヘロデとは別人なり。仔細を申せば父と子なりき。

紀元前三二三年、歴アレキサンダー山大王死して後、カナンの地はセレウコス朝シリアの支配する所となりけるが、シリアは耶路撒冷エルサレムの神殿にて異教の祭儀を行ひ、ユダヤ人の怨嗟を買ふ。紀元前二世紀中葉、耶路撒冷近郊モディン村の祭司ハスモン家にマタイア、マカバイの父子出でて、シリアに叛旗を翻す。父逝去して後、マカバイはシリアに占領せられたる耶路撒冷を攻略し、異教の祭壇を撤去するを得たり。マカバイ死したる後、弟ヨナタン、優位の裡うちにシリアと和を媾じ、大祭司の地位を承認せしむ。ヨナタン死して後、その弟シモン後繼となり、つひにシリア軍を耶路撒冷より悉皆放逐するを得たり。シモンの孫アリストブロス一世の世に至りて、「王」を僭稱してユダヤの聖俗の權を確立す。すなはちハスモン朝なり。

その孫の代に到りて、兄弟牆けいていかきに相鬭あひせめぐの段あり。兄ヒルカノス二世と弟アリストブロス二世なり。これが内紛によりて、ローマの介入を招き、王朝は衰退す。ヒルカノス勝利を得たるも、後來アリストブロスの遺兒アンティゴノスに敗れて王位を篡奪せらる。このアンティゴノス、パルタイアの支援を得て耶路撒冷に復歸す。

ヘロデ大王はヒルカノス二世の武將アンティパトロスの子なりき。ローマへ渡りて、第二回三頭政治にて名を擧げたるマルクス・アントニウス（後漢に使節を遣はしたる大秦王安敦とは別人）に厚遇せられ、元老院より「ヘロデはユダヤの王なり」と允可いんかせらる。アントニウスを伴ひて耶路撒冷に戻り、パルタイア軍を放逐して、アンティゴノスを斬首の刑に處す。かくして、ハスモン朝はカナンを統治すること僅々百年にて滅亡し、ヘロデ朝の成立を見る。なほ、ヘロデはヒルカノスの孫娘マリामネを娶りたり。

ヘロデの即位したるは紀元前三七年、逝去せしは紀元前四年。耶穌の生誕紀元前四年に比定せらるるは、聖書の記述より、王逝去の後、幾何いくばくもなく出生せりと解せらるればなり。

ヘロデ大王死して後、カナンの地は息三人の分割統治する所となる。長兄ヘロデ・アルケラオスは耶路撒冷を含むユダヤおよびサマリア、次兄ヘロデ・フィリポス（聖書にてはピリポ）はガリラヤ北方よりシリア南西の一角、末弟ヘロデ・アンティパス（長兄と末弟は同母の兄弟）はガリラヤおよび對岸のペレアを與へられたり。

耶路撒冷を支配したる長兄は六年の後、失政に由りて追放せられ、ユダヤとサマリアは羅馬の直轄地となる。次兄の封土は死して後、これまた羅馬の直轄地となる。

末弟ヘロデ・アンティパスは、紀元三九年までガリラヤとペレアを統治したれども、追放せられて  
畢<sup>をは</sup>んぬ。これみな羅馬の、カナン<sup>カナン</sup>の地を植民地と爲さずんばあらずとの陰謀に出づるのみ。耶穌の昇  
天したるは紀元三〇年前後と傳へらるれば、耶穌死して十年を出でずして、ヘロデ・アンティパスは失  
脚するに至れるなり。

耶穌は耶路撒冷に入り、ユダヤ人の陥穽に嵌りて捕縛の恥辱に遭ひ、總督ピラトの許へ連行せらる。  
ピラトは自ら裁くを忌避して、ヘロデ王に委ねんとて、引き立て來たるユダヤ人に斯<sup>かく</sup>は命じたり。然る  
に王、またピラトの許へ耶穌を返し、ピラトつひに屈して耶穌を見殺しにす。

ここに述べたるヘロデは、ヘロデ・アンティパスなり。耶路撒冷はローマの直轄地なるに、宜<sup>うべ</sup>なる  
かな、なにゆゑにガリラヤ王ヘロデのこの地にありやと訝らるる。

奇異に聞ゆらめども、ヘロデはガリラヤに居住するや久し。たまたま所用ありて耶路撒冷を訪れ、  
世界史上最大の椿事<sup>ちんじ</sup>に遭遇し、末代に惡名<sup>あくみやう</sup>を流すの悲運を味はひたり。

片やピラトは、耶穌を救はんとして果さざりしと傳へられ、近年カトリックにては、此人を列聖せ  
んとの企圖ありと報ぜらる。瑞<sup>ス</sup>西<sup>ホス</sup>山間のさる湖にては、如今に到るまで、時あつてかピラトの現はれて  
手を洗ひつつ、「我が手は罪に染まりたるに非ず」と訴ふるありとの由。

ヴァチカンの公文書館に、ピラトの耶穌と會見したるを羅馬に報告したる書面の存すと言ふ。處  
刑の間際にあらずして、以前に其の名の廣まれるを知り、召喚して引見したりとなり。曰く、「吃驚せ  
んがばかりの美男なり。その金髪見事なり」と。また曰く、「此の如きの智慧ある者、未だ嘗て我が知  
る所にあらず。或いはソクラテスを凌ぐにあらずや」と。この書面の信憑性には不審の儀あること甚だ  
しけれども、さりとて、やはか一笑に付すべけんや。

已<sup>すで</sup>而<sup>にして</sup>ヘロデ・アンティパスはバプテスマのヨハネを處刑したるを以て、神の前に罪を犯す。

事の次第は左の如し。

茲<sup>ここ</sup>に稀代の惡女ヘロデヤあり。ヘロデ大王の王子アリストブロスの女<sup>むすめ</sup>なれば、すなはちヘロデ・ア  
ンティパスの姪なりき。アリストブロスの弟にしてヘロデ・アンティパスの兄なるヘロデ・フィリポス  
(ピリポ／カナン北方およびシリア南西に封ぜらる)なる王子ありき。ピリポはハスモン朝ヒルカノス  
二世の女系曾孫(大王の娶りたるマリामネ所生)にして、これまたヘロデヤには叔父なりき。

ヘロデヤは叔父ピリポの妻となりて娘サロメを成したれど、ヘロデ・アンティパスの勢<sup>さかん</sup>ひ熾なるに  
引かれ、その誘ひに應じて、ピリポを離<sup>さ</sup>りて、此が妃となる。すなはち、叔父と別れて、別儀の叔父の  
妻とこそはなりたりけれ。モーゼの律法にては、故人となりたる兄の妻を娶るは推奨せらるる所なれ  
ど、在世の兄の妻を奪ふは嚴しく禁ぜらる。

さて、バプテスマのヨハネは耶穌の再<sup>また</sup>從<sup>いた</sup>兄<sup>と</sup>にて耶穌より半年の年長なり。神の子耶穌の先導を務  
むべく先に遣<sup>せん</sup>はされたる預言者なり。この人、夙<sup>つと</sup>に神の道を傳へて世に知られ、既に、耶穌にも洗禮を  
授けたり。

ヨハネ、ヘロデ・アンティパス王のヘロデヤを娶りたるの非を鳴し、天人許さぬ大罪なりとて誅<sup>とが</sup>  
るや熾烈なり。王つひに之を捉へて圜<sup>れいぎよ</sup>の人と爲す。ヘロデヤ、極刑に處せんことを望むも、王は民の  
ヨハネを信奉するを恐れて果さず。

一日、王宮中に宴<sup>うたげ</sup>を催し、その席にて、ヘロデヤの連れ子サロメ、華麗なる舞を舞ひ、これに感じ

たる王は望みあらば申せ、必ず叶ふべしと綸言汗の如し。於是歟、サロメ、母ヘロデヤに使噉せられて、ヨハネの首を所望す。宴席にて言を違ふるを怕れたる王は、直ちに獄吏に命じて、ヨハネの首を盆に載せて宴席に齎らしむ。

因みにサロメの名はヘブライ語シャローム「平安あれ」の謂ひなり。天の配劑何爲此は皮肉ならんと嘆息せであるべしや。

（令和二年四月八日受附）